接触場面におけるNSとNNSの協働過程に関する考察
── 多文化共生社会の実現にむけて ──

熊　井　浩　子

【要　旨】

近年、母語話者と非母語話者によるインターアクションに焦点を当てた接触場面に関する研究が進み、NSとNNSとのインターアクションがNS同士のやりとりとは様々な点で異なった特徴をもっていることが明らかになっているが、こうした状況の中でNSとNNSが多様な日本語を肯定的に捉え、コミュニケーションの目的を達成して、よりよい人間関係を築いていくことが重要であり、それはNS、NNS相互の協働によって初めて実現可能になると言える。本稿ではNSとNNSとの会話およびその後のフォローアップ・インタビューを分析し、接触場面においてどのようなインターアクションが行われ、双方がそれをどのように認識していたかを観察した。その結果、NSはNNSの日本語を多くの点でNSのそれとは異なると感じながらも、NNSの異質な日本語全てに対してマイナスの評価を下しているわけではなく、このNNSの外来性のある部分を外国人の日本語にはよくあることと捉え、それについては評価をしていない。また、この活動をとおして、言語ホストとしての配慮の必要性を認識している。またNNSは自分の行動をＪがどのように受けとめているのかを知ることができた。異なった言語的・文化的背景とする者同士が日本語を媒介としてコミュニケーションを行う多文化共生社会の実現という観点に立てば、接触場面において異質な部分はあっても、それが必ずしも解決すべき問題ではなく、多様な規範を認め合う一つのきっかけともなる。今後の接触場面で要求されるスキルを自律的に学ぶとともに新たな規範に向けた協働作業を可能にするために、日本語学習者がNSと互いのインターアクションを客観的に考察できるような活動を日本語教育の中で設定していくことが重要であろう。

【キーワード】接触場面　インターアクション　協働　多文化共生社会

１．はじめに

近年、母語話者と非母語話者によるインターアクションに焦点を当てた接触場面に関する研究が進み、母語話者（以下、NS）と日本語非母語話者（以下、NNS）とのインターアクションが言語管理・意味交渉という観点においてNS同士のやりとりとは様々な点で異なった特徴をもっていることが明らかになっている。言語管理というのは、例えば、相手の言っていることが理解できない場合、私たちは言い直しや明確化要求など、何らかの方法でそれを相手に示し、相手はそのシグナルを受け取って同じ発言を繰り返したり、わかりやすい形で言い直したりするが、このような、意思を伝え合うための努力、即ち意味交渉（negotiation of meaning）を行いながらインターアクションを調整することを意味する。

NSであれば、その社会においてどのような場面でどのような振る舞いをすればよいのか、

どのような言語行動が期待されているのかといった言語的・社会的、あるいは社会文化的な規範を暗黙のうちに共有しているといえるが、NNS の場合にはその外来性に由来する様々なレベルでの逸脱が起こりうる。その結果コミュニケーションに誤解や摩擦が生まれ、否定的な評価と結びついて、ときにはパーソナリティーの問題として受け取られてしまうこともありえる。日本語教育においてコミュニカティブ・アプローチの考え方が浸透し、コミュニケーション能力の養成を目指した活動が広く行われるようになってきたといえるが、学習者が接触場面で生じうるさまざまな問題に対処していくために必要なインターアクション能力を体系的に習得することを可能にするアプローチが日本語教育に一層強く求められているといえる。

さらに、NS 同士の会話を規範として接触場面における NNS のコミュニケーション能力をそれからの逸脱と否定的に捉えるのではなく、NNS の外来性をインターアクションを促進させるリソースとして、あるいは社会および個人のエンリッチメントの要素として肯定的に捉えようと視点も生まれている。例えば岡崎（2003）は接触場面において、参入側・受け入れ側双方に言語的・文化的共生過程が形成されるとし、言語的共生行動の形の協働過程として、相互調整行動・配慮行動・円滑行動を挙げている。相互調整行動は意味・理解・話題に関わる相互調整行動に分けられるが、これが蓄積されていくと会話をよりよく育成していくための配慮行動が形成され、さらにはより文化的な基礎に根差した発話行動の相互の歩み寄りによる円滑行動が形成されていくことになる。

また一二三（2002）は、このような視点から、接触場面における NS・NNS の意識面、発話内容面での処理および相互作用について分析し、共生的学習の可能性について考察している。この点に関しては土岐（1994）も、「いろいろな日本語を聞いて、それなりに偏見なく理解し、評価できるようになる」という聞き手の国際化を主張し、異質性・多様性に対して開かれた社会の実現を目指した教育プログラムを提案している。言語的多数派・強者としての NS が NNS を自らの規範に当てはめて相手を裁くという関係ではなく、NS と NNS がいかにコミュニケーションの目的を達成し、よりよい人間関係を築いていけるかこそが重要であり、それは NS、NNS 相互の協働によって初めて実現可能となると言えるだろう。

日本国内における留学生や外国人労働者などの居住者は確実に増えており、数の上からすれば多文化共生が進んでいると言える。しかし、人々の意識の国際化という点ではまだまだ問題が多いと言わざるをえない。例えば、静岡大学では 300 人以上の留学生が学んでいるが、留学生センター（2006 年より同センターの業務に学術交流を加えた国際交流センターという新しい組織になった。）が 2003 年に実施したアンケートと調査[注1]においても、同じ教室や研究室、アパートという身近なところに留学生という存在がありながら、彼らとの交流が必ずしも進んでいないという現状が明らかになった。

こうした状況の中、本国際交流センター（以下、センター）では、留学生の生活や学習を支援するための「留学生支援ボランティア」を組織している。これは一般学生からボランティア希望者を募って登録してもらい、来日時の買い物の手伝いや日本語授業・留学生関係のイベントへの参加、会話パートナーなど、大学やセンター、あるいは留学生個人が支援を必要とする場合にメールで登録者に情報を流し、参加希望者に返信してもらい、参

加者を決定するというシステムをとっている。毎年60名前後の学生が登録し、さまざまな活動に参加している。

筆者自身も頻繁に支援ボランティアの協力を仰いでいるが、そうしたボランティア学生は留学生にとっては市役所への案内や買い物の手伝いといった実質的な支援を提供してくれるだけでなく、日本語学習のリソースとしても貴重な存在となる。しかし、そのようなリソースがいつも有効に機能するとは限らない。その問題点についてはトムソン・舛見蘇（1999）に詳しい。しかし、多くの問題はあるにせよ、言語習得という観点から見ると、学習者は、ある言語形式がどのような意味を持ち、どのような機能を果たすかを実際のインターアクションの中で理解することが可能になるし、NSとのやりとりをとおして自分の発話が適切かどうかを知るためのフィードバックを得ることができ、それまでの学習の過程で独自に構築した文法を検証することができる。そして意思が伝わらず、確認を求められたり、訂正されたりしたときには、自分の言語の規則を修正するとともに、自らの言語能力を最大限に使ってその意図を伝えようと努力する。このようにNSとのコミュニケーションは第二言語習得においてきわめて重要な役割を果たすのである。さらに、こうした交流は、日本語学習を超え、留学生と一般学生の交流の場として人間関係を広げるきっかけとなるという意味でも非常に有効である。

逆に、一般学生にとっても一方的に何かをしてあげるという支援するもの、されるものという関係ではなく、留学生との交流をとおして異文化や多様な価値観に触れることで、視野を広げる絶好の機会にもなりうる。そのためには、NSは全く自分のスタイルを変えず、もっぱら教える立場で、NNSである留学生のみがNSとのやりとりの中から一方向的に学ぶというのではなく、NS自身も自らやNNSの言語行動を客観的に観察し、そこに生じうる問題点や特徴に気づき、それをベースとしてNNSとのよりよいインターアクションが可能になるような相互調整行動・配慮行動・円滑行動力を身につけていくことこそが重要であると思われる。こうした双方向的な歩み寄りの視点が他文化共生社会には不可欠である。大学の国際化が叫ばれる中、海外留学を増やすことがその近道と思われがちだが、こうした身近な留学生との交流という日常の積み重ねこそが、まず異文化理解、国際化への第一歩であると思われる。

また近年、教師が主体となって学習項目や学習方法が設定されていた教師中心の従来の捉え方から、学習の中心はあくまで学習者自身であるという学習者中心主義の学習観が生まれ、その根幹をなすものとして、学習者自身の目標に応じ、自己決定的な学習プロセスを重視する自律的学習の重要性が認識されてきている。学習者の自律性とは学習者が自己の学習の目的、内容、方法、評価基準などを自ら選択し、学習計画を立てて実行する能力のことである。学習は当然のことながら教室の中だけでなく、教室の外でも成立するわけであるが、NSとNNSとの教室内外での多様なインターアクションから学習者自身が自律的に学んでいくことを可能にするために教師はどのような役割を担っていくことができるのであろうか。

本研究では以上のような視点から、接触場面におけるNSおよびNNSの協働作業を可能にするための教師の役割について考察するための第一歩として、接触場面でのインターアクションにおいて、どんなことが起こり、それに対して双方がどのように感じ、どのよう

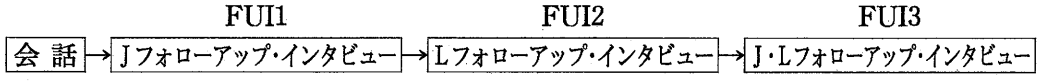
な行動をとっているのかを観察する。

2．調査の概要

先にも述べたように、NSの用いる日本語はNNSにとって貴重なリソースとなる。教室の中では教師が関わってある程度そのインターアクションをコントロールしたり、フィードバックしたりすることは可能であるが、教室の外では不可能であるだけでなく、自律的学習という観点からも望ましくない。しかし、自律的学習を効果的に進めるためには、その前の段階として教師自らや相手のインターアクションをどのような視点で捉えていくのかについての示唆となるような教師のフィードバックが重要であろう。そこで本稿ではNSとNNSとの会話のあとで、フォローアップ・インタビュー（以下、FUI）をとおしてそのインターアクションを振り返り、お互いが気づいたことを話し合うという調査を行った。同年代の女性であるNSとNNSに自由に15分程度会話をしてもらい、それを録画したものの最初の5分をカットした10分間のビデオをはじめにNS（FUI1）、次にNNS（FUI2）、最後にNSとNNSいっしょに（FUI3）という順に見ながら、それについて感じたことを話したり、筆者の質問に答えたりしてもらうというものである。調査の概要は以下のとおりである。

調査実施日：2006年8月4日
調査対象：NS　：静岡大学教育学部4年　20代・日本出身・女性（以下、J）
　　NNS：静岡大学教育学部研究生　20代・台湾出身・女性（以下、L）
調査実施場所：国際交流センター教室

調査の流れ：



会話の流れ：
夏休み・試験・授業→Jの留学・Lの大学院受験→留学の大変さ→Lの帰国→帰国してすること→Lの台湾での仕事・学生の方がいい→大学院・大学院修了後の仕事（通訳）→テレビで見た通訳→通訳の経験→日本語学習→Lの家族の日本語→日本語のむずかしいところ（外来語など）→アメリカ人外来語勉強している→花火（安倍川・サークル・日本平・袋井・練習・清水）→浴衣

NSは静岡大学教育学部4年の日本人学生（以下、J）、NNSは同大学教育学部研究生である台湾出身の留学生（以下、L）であり、日本語は時々発音や文法上の問題はあるが、大学での勉学生活が可能な上級レベルの日本語力を有している。ともに20代前半の女性で、二人は留学生関係のイベントで顔を合わせたことはあるが、それまで言葉を交わしたことはなかった。また、話題については困ったときのために「趣味・サークル・好きな人／もの、スポーツ、勉強、旅行、夏休み」を話題の例として挙げたプリントを事前に渡した

が、それにこだわらず、自由に話すように伝えた。

話題はまず夏休みの話から始まり、留学・大学院入試の話、通訳の話、日本語学習、花火の話へと展開していく。なおFUIでの報告では、最初は何を話そうかと意識していたが、この調査の対象となった開始５分後ぐらいにはもうリラックスしていつもどおりに話せたということである。

３．調査の結果

３．１．文　　体

３．１．１．文体の混交

会話はＪはすべてが普通体、Ｌは普通体が基調であるが、時折それに丁寧体が混じるというスタイルであった。ＪはFUL1でまず、Ｌの普通体と丁寧体の混交について指摘した。それは大きく二つの観点に分けられる。一つは、そうした混交が、相手と自分の先輩・後輩、年齢など、広い意味での上下関係に反していることに対する違和感、もう一つは、フランクな話し方に「そうなんですか」など、丁寧な話し方が混ざっていることへの違和感である。

前者についてＪは、普通体と丁寧体の混交自体はNS同士でも先輩と後輩などの会話にもしばしば見られるが、それまで年齢的に自分と同じぐらいか少し上だと思っていた相手の普通体の会話が急に一文だけ丁寧体になったため、「タメか先輩」であると思っていた相手が自分に対して敬語を使ったような変な感じがしたと述べている。Ｊが留学生の友人も多く、NNSとの日本語での会話にも慣れていて、NNSの日本語では普通体と丁寧対が混ざる場合が多いことをよく理解しているが、このような違和感は、Ｌの日本語がＪの普段接している留学生の友人に比べて高いため、留学生ということを意識せず、日本人と同じような感じで話していたと述べていることと関係があると思われる。文体の混交というNNSに多く見られる特徴を理解していながら、普通体と丁寧体の切り替えについては上下意識を反映するものという母語規範を適用していることがわかる。

一方Ｌは日本に来たばかりの頃、NSであるクラスメイトに、丁寧体が多いことを指摘されたことがあるという。来日して４ヶ月程度経った調査の時点では特に意識しなくても自然に普通体をベースにした会話ができるようになっていたということであるが、自分の文体の混交や、それが相手との上下の捉え方について意図しない情報を送っていたということには全く気づいていなかった。

また後者の違和感についてＪは、普通体の中で、急に「そうですか」・「はい」のようなあいづちや「は？」のような堅い聞き返しの言葉が入ることや、「この前本当にこわかったよ」「～してたよ」のようなに非常にくだけた言い方が混ざっている点を指摘している。しかし、普通体自体には全く問題ないにもかかわらず、なぜその一部のものだけがくだけた表現と感じられたのかについては意識していなかった。この「普通体＋ね」のうち、前者は会話の時点で気になった、後者は改めて聞くと気になると述べている。そのような点について、Ｌはあまり意識していなかった。

例１：

Ｊ：え、専門何？

Ｌ：専門？　あたし、台湾では専門は日本語だけしかないから、今うち（静岡大学。注筆者）へ来て…だから、今教育学部に入って、教育については全然わからないから、こわいよ。

Ｊ：ええ、そうなんだ、え、じゃあ教育学部の大学院に行くんだ。

Ｌ：そうです。だから今教育の勉強について勉強してる。

ただし、ここでの文体の混交は前者の場合と異なり、相手と自分の上下関係を決定する手がかりとしては捉えられていないため、それほど否定的な評価とは結びついていない。

なお、Ｊは前者・後者いずれの場合にも調整は行っていない。

３．１．２．裸の普通体

普通体での会話は、学生同士のうち解けた会話として適当であるが、Ｌの発話の中には上の例１の「勉強してる」の他、「勉強しないといけない」「テストしないといけない」など、終助詞を伴わず、普通体で言いきる形、即ち裸の普通体が数回出てくる。裸の普通体は通常メイナード（1991）で指摘されているように、いくつかの条件のもとでのみ用いることができるが、コミュニケーション能力がかなり高い学習者であっても、特に来日後あまり時間の経っていないNNSの中にはこの形を乱発してNNSに違和感を感じさせる場合も多い。この点ＪはNNSのこのような話し方に慣れていたので、気がつきはしたが、気にはならなかったとしている。この点に関してＪは、問題を潜在化させるストラテジーを取っていたといえる。一方、Ｌ自身は裸の普通体の問題に気づいていなかった。裸の普通体は日本語教育ではあまり取り上げられていない項目であるが、学習者の誤用が多く、NSにも違和感を抱かせる可能性が高いことからも中級以降の段階で触れるべき事項であると思われる。

例２：

Ｊ：試験は

Ｌ：ありますよ。また、なんか、一年間の研究生だから、日本人といっしょにテストしないといけない。

３．２．文　法

Ｊは会話の段階から例３の「忘れちゃったかなっと思って」、「私に対しては外来語」「外来語なら全然わからない」などを文法的な間違いと感じていたということだが、普段会話をしているときにも文法の間違いを直すことはあまりないということだった。Ｌの場合にはかなり高い日本語力を持っているため、多少の間違いはあっても意味は完全に理解できるということもあるが、友人のNNSで非常に文法的に問題があるにもかかわらず、自分ではかなり上手だと思っているという留学生の日本語を直していやがられた経験があったこ

とも関係しているという。

例３：

Ｌ：今までは、うらやましい、日本語ぺらぺらだなと思って、でも今、今から見るとまあまあですね。

Ｌ：でも、今もうお父さんももう、うん、勉強してないからだいぶ忘れちゃったかなっと思って。

Ｌ：その辺と、私に対しては外来語の方がむずかしい。だって漢字がいっぱいあるなら簡単、大丈夫だって思ったんだけど外来語なら全然わからない。

いくらNNSとはいえ、友人との会話で間違いのたびにそれを指摘されたり直されたりすることにはだれでも抵抗を感じるであろうが、それほど頻繁でないにしても相手との関係やタイミング、言い方によっては摩擦を引き起こすこともありえる。NNSの自己評価とNSのNNSに対する評価に差がある場合やその訂正の内容をNNSが自己のニーズと異なると感じた場合には特に問題になる。例えばNNSが日常会話の習得を主な目的の一つとしている場合、実際はくだけた言葉であることと非文法的であることとは多くの場合異質のものであるが、その誤りについて自分はくだけた日本語を学びたいのであって文法はそれほど必要ないのだと、その指摘を否定的に捉える可能性もある。Ｌはこうした経験から、コンテクストから意味が理解できる場合には特に修正しないと述べている。それ故、日本語力が低いNNSの場合には今回よりはもう少し訂正することがあるとも述べている。

いずれにしても、今回の調査ではＬの文法の間違いのいくつかはＪによって規範からの逸脱と認識されているが、それが否定的な評価とは結びついていないことがわかる。また、逸脱に対する調整も行われていなかった。

３．３．接続表現

Ｊが指摘した接続表現の問題には例４のような「だって」があった。会話の時には気がつかなかったが、録画を見ていて気になったということだ。「だって」は理由を説明するための接続表現であるが、子供が親に叱られて自己を正当化しようとしたときなどによく用いられることからもわかるように、多用すると他の人の言うことに耳を貸さないで自分の立場を言い連ねるような、強引な印象となる。それぞれのFUIのあと、FUI3でもう一度一緒に録画を見ながら話し合ったときにも何回かＬのこの「だって」が出てきて、Ｊも違和感を感じたという。逸脱はそれが繰り返されることにより、NSに強く認識されていることがわかる。しかし、FUI3でのＪの指摘や「だって」が持つ機能についての筆者の説明にも関わらず、Ｌ本人は特にこれを問題には感じていないようで、調査終了後３人で談笑したときにもしばしば繰り返されていた。

例４：

Ｊ：台湾に帰ったら、遊ぶ？

Ｌ：台湾に帰っ、たぶん友達と食事しかないと思うよ。だって、今友達ほとんど仕事し

　　てるから
Ｊ：ああ、そうね
Ｌ：夜の食事、食事ぐらいかなーって思って
Ｊ：ああ

この例での「だって」はＪとは無関係の事態について用いられているため、特に対人関係に問題が生じることはないと思われるが、例えば例５のように、自分と直接関わる状況であればまた事情は異なるであろう。

例５（筆者作例）：
教師：宿題しなかったの？
学生：だって、昨日は頭が痛かったんです。

「だって」のように表面的には誤用とは受け取られにくい逸脱で、特に聞き手に直接利害などの影響が及んでくると感じられる場合には、特に否定的な評価と結びつきやすいため、注意が必要であるといえる。

３．４．ジェスチャー

Ｌは笑いながら、体を前後に動かしたり手を叩いたりすることがしばしばあったが、Ｊはこれについては違和感がなかったと述べている。一方、両手でＶサインをした指を曲げて前後に振るジェスチャーの意味がわからず、気になったと述べている。Ｊは留学生の友達からそれはコーテーションマークの意味で、普通の言い方ではない、特別な言い方をするときに、「いわゆる」という意味で使うと教えてもらったと言っているが、それとも違うようなのでわからなかったと述べている。このジェスチャーの意味について説明を求められたＬは国にいたときから「やった」という意味で使っていると述べている。それが台湾で広く用いられるジェスチャーなのかどうかはわからないと述べた。ジェスチャーの中には半ば無意識に使っているものも多いので、それが相手にどのようなメッセージや印象を与えるのかということにも気を配ることも大切であろう。

３．５．ディスコースにおける言語管理

３．５．１．あいづち・応答

Ｌは先にふれたような「そうですか」など、そう系のあいづちのほかに「え～」・「ほんと？」を多発している。多用すると場合によってはやや大げさな印象も与えかねないこれらのあいづちについては、Ｊは「体がくっついているから」違和感はなかったと述べた。実際Ｌは上で述べたとおり体を前後に揺らしたり、手を叩いたりというジェスチャーとともにこうしたあいづちを用いることが多かった。それ故、会話をしているときはそうした言語随伴行動や笑顔、会話の流れ･テンション全体がこれらのあいづちを支えているため、特別な違和感はないが、録画ビデオで客観的に眺めると不自然さを感じるものもあると感じている。ただ、それはＬに特有の現象ではなく、自分のビデオを見て愕然とするという

ことはNSでもありうる。直接の会話者ではない周りの人に違和感を与えている可能性もある。

また、あいづちは話順を形成せず、相手の話順の中で行われるものであるが、他方、実質的な情報を担っていないこうしたあいづちがジェスチャーを伴って多用されるだけで、Ｌがターンを取らない場合、もう一方の参加者は単なる機械的な応答として受け止めてしまうこともあろう。Ｌの場合、FUIで、話の流れを非常によく理解し、それについての知識や類似した体験もあってＪの話に強い共感を示していたのだということがわかったが、実際の会話の中ではターンをとってそれについて説明することがあまりないため、表面的な反応という誤解を与えてしまった面もあったようにも思われる。このような逸脱は否定的に受け止められ、コミュニケーションの上でマイナスに作用するとともに、ときにはパーソナリティーに対する評価とも結びつく可能性があるといえるだろう。

３．５．２．談話マーカー

Ｌは新しい話題に転換するときに、例６のように「ところで」という接続詞を用いている。それまで、二人は留学することの大変さについて話していたが、両者が最小限の反応で応じているため、Ｌは新しい話題提供が必要だと感じて花火についての話を始めるが、その話題転換のマーカーとして用いられたのがこれである。これについてＪは教科書の会話のようで仰々しいと感じたと述べている。これに対し、Ｌは話題を変えるときにごく普通に使うと思っていたと驚いていた。

例６（外来語の難しさにについての話題の終了部）：

Ｌ：ふうん。

Ｊ：そっか。

Ｌ：ところで、花火行った？

「ところで」が話題転換の機能を担っていることは事実であるが、このＪの指摘により、それをどんな場面で用いることができるというＬの言語規則の修正が必要になってきたわけである。ただし、これも実質的な意味の伝達には関わらないため、Ｊは調整を行っていなかった。

３．５．３．発話権と会話への参加

また、同じ花火についての会話の中で、Ｊが吹奏楽のサークルに所属していると話したときに、例７①のように「すごいね」とＬが応じたことについて、使っている言葉自体はいいが、「外国語のあいづち集からもってきたもののよう」で、大げさに感じたと言っている。驚きや感動を表すこの表現とサークルに単に所属しているということにギャップを感じたためである。Ｊ・ＬでのFUI3の時にＪがこの「すごいね」に感じた違和感について話したとき、Ｌは自分は楽器が全くできないので、クラリネットができることがわかり、すごいと感じたための反応だと述べた。ＬはＪが感じた違和感に全く気付いていなかった。FUI3で二人はこのずれを、楽器ができることを当たり前のことと捉えているＪとそうでは

ないＬの捉え方の違いがこのようなギャップを生んだと分析していたが、Ｌが「すごいね」という感嘆の言葉を用いながら、それを感じた理由を説明していないため、ターンはとっているが単なる大げさな相づちの一種と受け取られたことによるものであるといえる。

例７：

Ｊ：あたしね、安倍川の日に、あのう、会館のみんなと遊んでて、その前まで。
Ｌ：え、そうですか。
Ｊ：で、わたしは、あの、AOI ってわかる、駅の前にある…
Ｌ：あっ
Ｊ：郵便局のビルにある
Ｌ：あっ
Ｌ：あっ
Ｊ：そこのビルで吹奏楽の練習があったの。わたしクラリネット吹いてるの。
Ｌ：あっ、すごいね①、
Ｊ：そう、それで②、そのね、えっと、今度８月の６日、もうすぐだよね（あ）あさってか、コンクールがあるんだけどそれの練習があったの、AOI で、その花火の時間ぐらいに。で、わたしその前まで会
Ｌ：え～　え～
Ｊ：館でみんなと遊んでて、で、会館の子達が浴衣に着替えて、さあ行くよっていうときに、あたしは普通に私服で、Ｔシャツと Ｇパンで、（笑い）、なんか会館の子達といっしょに、あの会館出て、歩いて駅まで行って、「じゃあね、ここまで」
Ｌ：寂しい（笑い）寂しいよね。
Ｊ：そう。行ってらっしゃい、楽しんできて（笑い）で、そこに行く途中で友達に会ったりして「行かないの？」
Ｊ：って言われて「行かないの」③
Ｌ：「行かないです」④（笑い）
Ｌ：そうなんだ。
Ｊ：そう。

しかし、Ｊが感じた違和感は、それ以上にＬの会話参加上のルール違反が背景にあったのではないかと思われる。この話題の中心はあくまで花火であって、Ｊが吹奏楽や楽器の話を持ち出したのはサークルのせいで花火に行けなかった理由としてである。この間Ｊが一貫して発話権を持っているといえるが、そういう場面でＬが単なるあいづちではなく、話順をとって驚きや感動を表すことにより、話が脇道にそれたような形で話の流れがそがれてしまったことも一因ではないかと思われる。事実ＪはＬの反応についてコメントすることはなく、例７②のように「それで」を用いて話を花火に行けなかったという話題に引き戻している。

このような過失は NNS 固有の問題ではなく、NS でも違反であるといえる。しかし、話題の中心でない部分でのあいづちは控えめに打つということはおそらく多くの言語に普遍

的に当てはまることであると思われるが、そのルールを適切に行使するには相手の意図や話の流れ・今後の展開を読みながら聞くという総合的なテクニックが要求されるため、NNSにとっては非常に高度な作業となる。加えて、日本語では諸言語に比べてあいづちが多いとされているため、NNSが逆に過剰なあいづちを打ってしまうということもありえる。さらにそれが今回のようにあいづちを超えて話順と理解されてしまった場合の過失はより重くなるであろう。

以上はＬの不適切な話順の例であったが、二人の協働により、非常に協調的な談話展開がなされた場面もある。Ｊの発話に対し、Ｌが重ねて「そう、そう、そう」というあいづちをうったり、「私も」と応じてくれたり、例７③･④のようにＪの「行かないの」に対し、Ｌも「行かないです」と重ねて言ってくれたことについて、Ｊは気持ちが通じ合った感じがして嬉しかったと評価している。Ｊは自分が始終会話の主導権を握っていることが気になっていたが、ここで一方的な会話でなく、共感し合えたように感じたと述べた。この部分の重なり発話についてはＬも同様の感想を述べていた。ここではＬのあいづちも短く、笑いも伴って非常にテンポよく協同的な会話が進んでいたと言える。

また、例８で袋井の３万発の花火大会があるのに、地元の花火の方を選ぶというＪに対し、Ｌが重ねて「ホントにそう思うの」と尋ねているが、これについてＪはＬが絡んできてくれて嬉しかったと述べている。

例８：

Ｊ：自分のお祭りの方が大事だから、だから、あっ、いいよ、自分のお祭り行く、友達がすごい誘ってくれるのに、ああ、じも、自分のお祭りあるから

Ｌ：（手を叩いて笑う）

Ｊ：三万発を蹴って（え～）自分のお祭りに行って

Ｌ：ホントにそう思うの。

Ｊ：自分の　ホント、ホント自分のお祭り大好きだから。

Ｊは自分が話しすぎていることについて、NNSとの会話で、相手の日本語力が低い場合にはもう少し相手に質問したりするが、NNSの日本語力が高い場合や相手がNSの場合にはほとんど自分が会話をリードして話し続けると述べている。その結果今回もＬの発話量はＪに比べて非常に少ない。安倍川花火の話にしても、元々話題を切りだしたのはＬであるにもかかわらず、Ｊがすぐに発話権をとって話し始めたため、ほとんど実質的な話題を提供していない。この点についてＪはＬの「話をつぶしてしまった」と感じ、もっと話させてあげればよかったと述べている。また、それに先立つ通訳の話段でも通訳になりたいというＬの話からＪが昨日見たテレビ番組に出ていた通訳の話へと話題を転換させている点についても同様の感想を持っていた。

一方その点についてＬは、日本語でも母語でも、相手が話さなければ自分が話すし、相手がどんどん話す場合には自然と聞き役に回ると述べ、今回の会話がほとんどＪ主導で進められたことに全く抵抗はなかったということである。しかしNNSによってはそのようなＪの話し方を一方的だと捉え、ストレスを感じる場合もあるであろう。

ＪはNNSの日本語力が低い場合には言語ホストとして発話がある程度均等になるような配慮行動を行っているが、今回のＬのように日本語力が高い場合にはそれがなされなかったということを認識し、言語ホストとしての自らのコミュニケーションの問題点として受け止めている。このようなNSの気づきがNSとNNSのよりよいインターアクションには不可欠であろう。

３．６．調整行動

今回の調査でＪはＬがNNSであることはほとんど意識していなかったということだが、「教育実習」など、日本の教育システムに関わる日常的でない言葉やAOI・袋井などの場所の名前に関しては発話の後にポーズをおいたり、「～ってわかる」などして理解を確認している。この点で、言語ホストとしてのＪの配慮が感じられる。

また、今回のインターアクションの中で、Ｊの発話の中でＬが知らなかった言葉に例９①の「ぼかし」があった。これは浴衣の柄について説明する場面で使われたのであるが、②のようにＪが「わかる？」とＬの理解を確認し、Ｌが理解していないことがわかったため、これについて日本語での言い換えの他、③のようにsmokyという英単語を使うというストラテジーを用いて調整を行っている。

例９：

Ｊ：なんかね、えっと、きょー年、去年かな、浴衣を買ったの。（へえー）それも、その前の年からすごい浴衣がほしくてほしくてたまらなかったんだけど、でも、これがいいっていうのがなくて、（ああ～）、これは可愛い、確かに可愛いけど、あっ、イマイチかな、可愛いけど（ん、まあ）、って言ってて、で、うちのお母さんがいい浴衣を買いなさいって言って（ん）、こう、しっかりしたものを長く着なさいって言うタイプだから、で、うちのお母さんも、若い頃つか、作った浴衣をまだ（えっ）帯を換えて、帯だけ換えて、雰囲気がすごい変るから、帯だけ換えて着てたりとかするから、いい浴衣を買いなさいってそう言ってて、でそれに去年巡り会って（え～）、で去年買ったの。（へえー）で、去年はね、確かね、どっか行ったな。なんだろう、で、どっかのたぶん花火にいったんだよ。

Ｌ：え～、どの色。

Ｊ：紺。そう、紺色のなんかね～、なんていうのかな、ちょっとぼかし①がかかったような紺色、わかる？②ぼかしってなんか、紺がぬめってしてるんじゃなくて（あ～）、紺が透明感があるやつじゃなくてsmoky③な感じ。smokyな感じの紺に（ああ）、うちわの柄が、うちわのね（え～）柄のぼかしがほわ～んと入ってるの。

Ｌ：可愛い。

しかし、Ｊはこの調整がうまくいかなかったと述べている。一方Ｌはぼかしを色に関わることと理解しているが、色は説明しにくいので、だいたいわかればいいと思ったと述べている。むしろＬは浴衣の説明を聞いて可愛いと思ったが、実際に見たわけではないので、「可愛い」と言えばいいのか「可愛いと思う」と言えばいいのか迷ったが、結局「可愛い」

と言い、それがよかったかどうかわからないと述べていた。この点についてはＪは全く問題ないと述べている。言葉の意味についての言語ホストとしてのＪの詳しい説明をＬは否定的に捉えていないが、この時点でのＬの関心は別の部分であったわけであるから、どこまで説明すればいいのかということについて両者において多少の認識の違いがあったことがわかる。このこと自体は接触場面に固有な問題ではないが、相手が完全に理解するまで説明しなければならないという意識は言語ホストである場合により強くなるので、NS 同士の会話に比べてそのようなズレが生じる可能性が高く、それに対して NNS が違和感を感じることも考えられる。今回はその例といえるだろう。

また NS が NNS の発話が聞きとれない部分が２ヶ所あった。NS 同士の会話であれ接触場面であれ、相手の言っていることが聞き取れない、あるいは理解できないということはしばしば起こりえる。騒音や発音の問題で音が聞き取れなかったり、音は聞き取れても間違いや知識・前提の違いから内容が理解できないということもある。Ｊは今回のＬの発話ではわからないところはほとんどなかったと言っているが、例 10 の夏休みについての話題の中の「大学院」という言葉が聞き取れなかったと言っている。しかし、すぐ言い直しを求めることはせず、最初は少し聞いてその文脈から理解するというストラテジーをとっている。これは通常の NS 同士の会話における対応と同じである。しかし、それに続くＬの「今」以下も不明瞭で、理解できなかった「大学院」を推測させる手がかりとならなかった。このため、引き続きＬが発話権をもって会話が進む可能性が高く、このままだといっそう修復が難しくなると考え、ここでＪは「え、なになに」と聞き返して、調整を行っている。

「募集要項」は聞き取れたということなので、類推も不可能ではなかったとも思われるが、Ｌがその前の発話で既に週７コマの授業に出ていると述べていたため、Ｊが大学院の受験を控えていることを全く想像していなかったという事情にもよるであろう。

例 10：

Ｌ：私、あの、最近なんか、大学院の入試、にゅう、募集要項もらったよ。だから
Ｊ：ん
Ｌ：今、勉強してる。
Ｊ：え、なになに、
Ｌ：大学院の
Ｊ：大学院、え、大学院の
Ｌ：はい。

一方、次の夏休みの予定についての話題の中で、例 11 のように、発音の問題もあってはっきりとは聞き取れなかったが、文脈から類推し、繰り返すことで流れを止めずに確認すると言うやりかたで調整を行っている例が観察された。

例 11：

Ｌ：でも、あ、中旬ぐらい台湾に帰る予定。
Ｊ：そうなの。

L：うん。いしゅかん（一週間）ぐらい。
J：あっ、一週間ぐらい。
L：うん。

もうひとつJがLの発話で理解できなかったように思われた言葉に「日活」があった。Lの「日活」という言葉に対しJの反応がなかったため、はじめは自分の発音が聞き取れなかったと考え、「にっかつ」と3回繰り返したが、Jが「にっかつ？」と言ったため、さらに漢字表記を伝えるとともに、「有名な映画の会社みたいなの」とその意味を説明している。ここでLは発音の繰り返しではうまくいかなかったと考え、漢字の説明および実際に手に書いて示すというように、文字を媒介として意図する言葉を伝えようとするストラテジーをとる。とともに、日活の意味をわかりやすく説明しようと試みている。一方Jはそもそもこの会社を知らなかったが、話の流れから、映画関係の仕事であるということはなんとなくわかっていたと述べている。つまり、Jのこの「にっかつ？」は聞き返しというよりは繰り返しで、話を促すためのストラテジーとして用いられたものであり、日活の意味そのものの説明を求めたものではなかったが、その意図がLには伝わらず、このような行き違いが生じている。Lが繰り返し日活と言っているときにJがその意図を伝えていれば、もう少しスムーズに進んだであろう。NSにはこのような配慮も不可欠であろう。

例12：
L：この前なんか、日活、にっかつ、にっかつ　　日本の日に、活動の活（手のひらに字を書きながら）、うん
J：　　にっかつ？
L：有名な映画の会社みたいなの…
J：　　うん。

4．まとめ

以上NSであるJとNNSであるLのインターアクションにおいて、双方がお互いのインターアクションをどのように捉えているのかを考察した。その結果、Jは文体・文法・接続表現・談話の展開など、様々なレベルでLの言語行動に外来性を感じていることがわかった。例えば文体においては、文体の混交をNNSの日本語によく見られる現象と捉え、そのある部分は評価せず、多様な日本語の形として受け入れているが、ある部分に関しては母語規範を適用し、否定的な評価を下している。また、文法については逸脱を認識しているが、それに対して調整したりすることはなく、マイナスの評価に結びつくことも今回はなかった。ところが、ディスコースのレベルや接続表現などに関しては、逸脱がマイナス評価に結びつく可能性がより高い傾向が示されている。ただし、今回は特にある課題を達成するというタスクはなく、いわゆるおしゃべりであったことから、JやLの利害に結びつくという状況ではなかったこともあり、このようなマイナスの評価が全体としてNNSに対する否定的な評価と結びついてしまうことはなかった。

また、Jは、ある場面では言語ホストとして振る舞うことにより、コミュニケーション

をスムーズに進めているが、相手と自分の発話量のバランスという点では、日本語力の高いＬに対する配慮が十分に働かなかったり、相手の要求以上の説明をしてしまうという場合もあった。しかし、FUIの過程で自らの言語行動の問題点に気づき言語ホストとしての役割に対する認識が生まれた例も観察された。一方Ｌは自分のインターアクションをＪがどのように評価されているのかを知ることができた。

異なった言語的・文化的背景とする者同士が日本語を媒介としてコミュニケーションを行う多文化共生社会の実現という観点に立てば、NSとNNSのこのような接触場面におけるインターアクションとその観察を積み重ねていくことが重要であり、それによって異質な部分はあっても、それが必ずしも解決すべき問題ではなく、多様な規範の一つとして肯定的に受け入れる一つのきっかけともなりうる。今後の接触場面で要求されるスキルを学ぶとともに新たな規範に向けた協働作業を可能にするために、日本語学習者がNSと互いのインターアクションを客観的に考察し、自律的に学んでいけるような活動を日本語教育の中で設定していくことが重要であろう。

５．おわりに

JFUIの際Ｊは「話しているときは意識していなかったけど、客観的に見たとき、Ｌの日本語が日本人と同じになるのはまだまだだなあと思った」と述べている。このコメントは、上級と言われるNNSであっても種々の誤用やルール違反があり、NSに外来性による違和感を感じさせないような日本語力を身につけることがいかに困難なことであるかを物語っている。その異質性は発音・文法・文体・ディスコースレベルと多岐にわたる。このように、留学生との交流が多く、日本語学習者の話し方に慣れているＪであってもやはり、NNSに対しNSと同質の日本語力の獲得をゴールとして描いていることがうかがわれる。しかし同時に、NNSの日本語を多くの点でNSのそれとは異なると認識しながらも、NNSの異質な日本語全てに対してマイナスの評価を下しているわけではない。これは、先の土岐の言う国際的な聞き手という見方と一致する。また、この活動をとおして、言語ホストとしての配慮の必要性を認識するという場面も観察された。このような場面の積み重ねがNSとNNSの共同作業の実現へと結びついて行くであろう。今回の考察はそれに向けての一歩として、ごく断片的な記述の域を出ていないが、さらにデータをより多く蓄積していくことにより、これを体系的なプログラムへと発展させていくことが今後の課題である。

注

１）静岡大学留学生センター（2004）参照。

参考文献

岡崎敏雄（2003）「共生言語の形成　－接触場面固有の言語形成－」（宮崎里司・ヘレン・マリオット編『接触場面と日本語教育　ネウストプニーのインパクト』）

静岡大学留学生センター（2004）『静岡大学国際化へ向けてのアンケート調査』

トムソン木下千尋・舛見蘇弘美（1999）海外における日本語教育活動に参加する日本人協力者　－その問題点と教師の役割－」『日本語教育論集世界の日本語教育』第９号、国

際交流基金
野原美和子（1999）「学習者の自発的な発話を導く教師の学習支援的言動　－積極的な自発的発話の場合－」『日本語教育論集世界の日本語教育』第９号、国際交流基金
一二三朋子（2002）『接触場面における共生的学習の可能性』風間書房
村岡英裕（2003）「アクティビティと学習者の参加　－接触場面にもとづく日本語教育アプローチのために」宮崎里司・ヘレン・マリオット編『接触場面と日本語教育　ネウストプニーのインパクト』）
_____（2006）「接触場面における問題の類型」村岡英裕編（社会文化科学研究科研究プロジェクト報告集だい129集）、千葉大学大学院社会文化科学研究科『多文化共生社会における言語管理』Vol. 4
メイナード．K．泉子（1991）「文体の意味　－ダ体とデスマス体の混用について－」『月刊言語』Vol. 20－２大修館書店

On a Collaborative Interaction between NS and NNS in a Contact Situation
— Towards the Coming Multicultural Society —

KUMAI, Hiroko

Studies focusing on contact situations demonstrate that interaction between NS and NNS differ from those between NS and NS. It is therefore important for both NS and NNS to recognize that there are various forms of Japanese, including different dialects among NS as well as different forms of Japanese among NNS, all of which deserve to be viewed positively and collaborate in order to achieve their goals and establish a good relationship. From this stand point, this paper analyzes interactions between NS and NNS with followup interviews and sees how they interacted and how they evaluated each others' behavior. Results show that NS noticed various differences, some of which she didn't evaluate negatively, regarding them as common phenomena among NNS. She also looked back on her own communication with NNS and felt that she should have had more consideration as a language host. On NNS's part, she could learn through the discussion how her interaction was viewed by NS. Towards the coming multicultural society where those with different cultural and linguistic backgrounds will interact in Japanese, this kind of activity will provide a good opportunity to realize that problems arising in contact situations are not necessarily something to be solved, but rather, something to be accepted as a part of a range of norms. It is important for Japanese language educational activities to provide learners with opportunities where NS and learners of Japanese can objectively observe their interaction and share how they feel about their behavior in order for them to autonomously learn better skills necessary for anticipated contact situations and collaboratively develop new norms.